

大岡昇平全集

第一卷

大岡昇平全集 第一卷

定価 二八〇〇円

昭和四十八年十月二十日 印刷

昭和四十八年十月三十日 発行

著者 大岡昇平

発行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一

電話(五六一)五九二一

〒104 振替東京三四

検印廃止

©一九七三

大岡昇平全集 第一卷 目次

初期作品

訳詩三篇 ジェラルド・ネルヴァル

ルユクサンブールの小径

森の中にて

従妹

ランボオ ポオル・クロオデル

タルチュフ懲罰 アルテュル・ランボオ

横光利一氏の『母』

『樹のない村』と『幼き合唱』

『自然と純粹』讃辞

批評家ジイド

作家の倫理の問題

河上徹太郎の文章に就いて——覚書

アラン『散文論』祝辞

3

4

9

10

14

18

20

21

25

28

「リアリズム文学の提唱」に就いて	30
ジイドの流行	34
破片	37
青春	39
短篇小説に就いて	62
『春琴抄後語』の読後感	66
『M・子への遺書』ほか	69
不安について	71
スタンダール——テエヌ	73
伊藤富士雄『村の人々』	75
年頭平凡——新年号を読んで	76
森山啓の『知識階級と文学』ほか	78
能動主義・新浪漫主義について	80
ジイドと横光利一——純粹小説とは何か	81
小野さんの印象	85

肉体の問題——永井龍男氏『ある男の帰宅迄』

『アンリ・ブリュアルの生涯』

古谷綱武——『横光利一』祝辞

スタンダアル（一七八三—一八四二）

『赤と黒』——スタンダアル試論の二

小説の問題

武藤貞一『戦争』

ポール・ド・クルーフ『死と闘ふ人々』

フランソア・モオリヤック『イエス伝』

ジョセフ・ケッセル『流弾』

農民作家小説集『平野の記録』

大佛次郎『雪崩』

スタンダアル『ナポレオン』

小林秀雄『現代小説の諸問題』

小林一三『次に来るもの』

杉山平助『新恋愛論』

チャーチル『世界大戦』

答——杉山平助氏へ

『赤と黒』のモデル

女流作家のナルシシズム

武藤貞一『日支事変と次に来るもの』

新しき雄弁について

伊藤整『青春』

ステファン・ツワイク『知性と感性』

スタンダール『ラシーヌとシェイクスピア』

アランの文体について

近代人の典型——『チェルリイニ自叙伝』

マキアヴェルリ『君主論』

スタンダール『ハイドン』解題

スタンダール『ハイドン』について

ティボーデ 『スタンダード伝』 後記
バルザック 『スタンダード論』 解説

小説 一

俘虜記

捉まるまで

サンホセ野戦病院

タクロバンの雨

パロの陽

生きている俘虜

戦友

季節

労働

八月十日

新しき俘虜と古き俘虜

演芸大会

帰還

附 西矢隊始末記

解題

池田純益

463

447

430

412

396

383

342

初期作品

訳詩三篇

ジュラルド・ネルヴァル

ルルクサンプールの小径

すこやかに少女は過ぎぬ、
いそいそと小鳥の如く、
手に持てる輝ける花、
口ずさみ行く新しきリフレイン。
そはたゞひとりこの世に在りて
わが心に応へ給ふべき君か。
或るはまた闇深き夜
われを照し給ふべき眼差の君か。
あゝ否とよ！——わが青春ははてぬ。
さらば、かつてわれに輝きし光、

薫香よ、少女よ、ハルモニ―よ、
幸福を過ぎぬ——遁れ去りぬ。

森の中にて

春なれば雄鳥は生れ啼くなり。
君よ、その歌声を聞きしや？
そは一すちに純にしてしかもせつなし、
鳥の声よ——森の中にて。
夏なれば雄鳥はその配偶を求む。
彼は一度は愛すれども、再びとはあらず。
その柔らかに、忠実に平和あらんことを、
鳥の巣よ——森の中にて。
さて、褐色の秋とはなれば、
彼は黙す、凍ゆる時の来らん前に、
おゝ、幸福の多からんことを、
鳥の死よ——森の中にて。

従妹

冬にもその寒しみはある、時々日曜日など、
かすかな日射が白い地面を黄色にする時、
人は従妹と連れ立つて散歩に行く……………
「御飯までには帰つておいで。」

とお母さんが云ふ。しかし二人がチェイルリーで、
黒い樹の下に着飾つたきらびやかな人達を見ては、
少女は寒さが身に泌みる……………そしてあなたに指し示す、
夕霧がだん／＼上つて来るのを、

そこで二人は、悔いても帰らない、あんなにも早く過ぎ
去つた美しい日々や、

慎み深かつた情愛について語り乍ら歩みを返す
家に入ると盛んな食欲で二人は感じる、
階段の下で——真赤に炙けた七面鳥を。

〔城〕昭和四年二月号

ランボオ

ポオル・クロオデル

アルテュル・ランボオは野蠻状態の一神秘家、飽和された
土より湧き出でた人知らぬ泉であつた。彼の生涯は誤算に終
始し、遂に余儀なく切斷された両脚を以てマルセーユの病院
の寝台で自得するに至るまで、彼を促し彼を駆り立てしかも
彼自身認識しようとはしない声よりの無益の脱走の企画であ
つた。

「幸福よ！ 絶え入るばかり柔しきその齒は我身の鶏の歌
に——朝、再来する基督に——またいともほの冥き街々へと
誘ひぬ。」「我等はや世に在らず。」「心靈によりて人は神に達
す。……………童貞の幻影の我に來りしはこの目醒の時なりき。…
：若し我この一時を去るべく、より目醒まされてありしなら
ば。」（そしてすべて賞讃すべき「地獄の季節」の旅程。）
「傷ましき非運よ。」

多くの本文に私が敢へて聖ジャンタルに借りたる次の一節

を比較せよ。

「黎明に当りて神はわが靈の頂に殆ど感知し得ざる細き光を味はしめ給へり。すべて残余のわが魂と力とは些かも楽しまざりき。されどその光は凡そアペマリアの時の半ばより続かざりき。」

アルテュル・ランポオは一八七〇年、我が歴史の最も物悲しき一時期に、潰滅と内乱と精神上にも物質上にも失敗に満ち、実利主義者の無感覚に満ちた時代に現れた。彼は突如身を擡げた。「恰かもジャンヌ・ダルクの如くに。」後年彼は詠嘆的にかう書いた。我々はパテルヌ・ペリシヨンの本にこの天職の悲劇的な物語を読まねばならぬ。しかし彼が耳にしたのは一つの言葉ではなかつた。声でもなかつた。たゞ単なる一抑揚、しかもそれが爾來彼を不休にし、「御婦人とのお連れ」を不可能ならしむるに充分であつた。それに依つて吾が造られ、無言のまた自ら斯沈黙することを選んだ手の中にあつて、或る優れた意志が彼を指嗾したと考へるのは果して無謀であらうか。十六歳の少年が斯も天才の表現の能力を賦与されてあるのは果して世に数ある例であらうか。それは我等の語り合ふ疑ふべからざる物語、かの初生児の口より漏れる神の頌歌と同じく稀れである。そしてかゝる不可思議な

る場合に當つてそも如何なる名称こそ与へらるべきであらう。

「我は生きぬ。自然なる光の黄金の火花！ 欣びもて我は道化と錯乱の限りなる発想を取りぬ。」一度か二度、エデンの純朴と限りなき柔和悲痛なる哀愁の調音が、蕪雜なる文学の雑音の中で野卑蒙昧な人達の耳に入つた。そしてそれで充分であつた。「私は私の血汐をかき乱した。私の義務は私に委ねられてゐる。」彼は語り終つた。人は開封された心に秘密を托しはしない。かの聖者の如く「思想は語られることによつては熟さない」と知つては彼も黙つて耳を傾けるより外はなかつた。熱烈深奥なる好奇心と、「異教徒の言葉」にては説明すべからざる神秘的な同感を以て、彼はこの我等を廻り、彼の知つた如く最早反映と謎語によつてしか我等の見ない物を眺めた。即ち「或る物の始め」であり、拓きかけの道路であつた。この世紀の末に於ける諸々の探求者によつて開かれたる宇宙に対して精神の勝利を捷ち得るためにはその創造を究尽し、その云はんと欲する何者かを知り、遂に彼自身の底なる苦悩の聲に幾何の言葉を賦へるためには一生涯と雖も充分ではないのである。

我々は今日、傷ましくも彼が名付けた「望されたる者の手帳」の幾枚かと、この一日の賓客が最早「我々と同じく高尚でない誰をも見ないために」立ち去る時に残した幾頁かをと

持つてゐる。ランボオの文学的生涯の斯も短かく終つたにも拘らず、なほ三つの時期、三様の態度を認めることが出来る。最初は、強暴と純然たる男性のそれ、日を血汐の一迸の如く、堅忍すべからざる叫声の如く受容する盲目の天才のそれである。詩句は力と未聞の性急さを持つ。

肉体は尅大なる苦惱によりて磁化し、

汝は怖るべき生命をも呑み尽す、血管に

潑刺たる詩韻の満潮の湧出するを汝は感ず。

(巴里は人口を殖す)

されど、おゝ女、心情の徒、甘き慈愛よ！

(慈恵病院付看護婦)

この天才の一脱皮期に臨席して、一種の呪詛と歎歎と片言の交りの眩きの間に、燦然たる行跡の輝くのを見るのが如何に素晴しいか。

第二期は見ることにそれである。悲愴なる未熟を以て一八七一年五月十五日附の手紙に於て、また「言葉の錬金術」なる標題を持てる地獄の季節の教員に於て、ランボオは彼の開いた新しい芸術の「方法」を了解せしめ様と試みた。それは全く真個の錬金術であり、この世界の要素の変質、その上澄を移し取る如きものであつた。彼を死ぬまで離さなかつた遁走の要求、あらゆる幼児が目を拳で押し潰すこの「見る」と

いふ欲望の中には、凡そ模糊とした浪漫的な郷愁とは全く異つたものがあるのである。「まことの生活は去りぬ、我等はや世に在らず。」意味する所は逃走には非ずして、「処と形と」を「エデン」に発見することである。「太陽の子」なる我々の原始状態を再び獲得することである。——朝、人とその追憶とが同時に目覚めなかつた時、或は歩行の長い一日行程に於て、魂とその韻律的専制君主に服従せる肉体との、一種の継続の中断が生じることがある。謂はば「開眼した」睡眠の如きものが建設される。まことに特異な純粹な受容の一状態である。言葉は表現としてよりは寧ろ表徴としての価値を取る。精神の表面上り来る偶然の言葉、疊句、絶えざる文句の纏著は、一種の呪文の如きものを形成し、継続して遂に意識を凝固させるに至る。その間我々の内心の鏡は、外界の事物については殆ど物質的な感受の一状態に放置される。物の影は直接に我々の想像に投影して、その虹暈色の上で調色される。我々は交感の中に置かれる。——この歩行者の二重の状態を「イルミナシオン」は表現してゐるのである。一方には小児の輪舞曲、歌劇の台詞の言葉、に似た小さな詩句、他方には文法的な彫琢、及び外部的な論理に換ふるに、直接にして比喩的なる一種の接合を以てする。均勢を破りたる諸影像である。「我は架空のオペラとなりぬ。」詩人は最早や言葉を素むるには非ず、反対に身を沈黙の境に置き、自らの上

に自然を通過せしめて表現を見出すのである。一種の「引掛け曳き寄せる」感性的なる方法である。世界と自己とは互に隠し合ふ。この想像的勢力に於ては「如き」なる言葉は消失し、幻覚が君臨し、隠喩に於ける二つの単語は彼には殆ど等しく現実性を持つ如く見える。「数多の他人の生は私には各自その存在に相当すると見えた。この御方は自らなざること御存じない。彼は天使だ。そしてこの家族は仔犬の一群だ。」素晴しき実施、卓れて堅実にして理想的なる頭脳をも錯乱せしめたであらう神秘的な「物質主義者」、しかしそれはまた靈魂に赴き、この「不在なる」自然より仮面を引剥ぎ、終にはあらゆる感覚に受容さるべき主題、「一精神、一肉体中なる真実」我等の個別的なる魂に適合する世界を所有することであつた。

第三期。——私は既に屢々「地獄の季節」を引照した。かくも暗鬱に、かくも傷ましき、しかも或る神秘的な優和の滲み通つた本について、パテルヌ・ペリションがした決定的な分析に附加へるべき殆ど何物も残つてゐない。其処ではランボオは芸術に成熟して、観念的な音が、ストラディヴィウスの髓の多い乾木の如くその最後の纖維にまで滲み通つてゐる散文を我々に聞かさうとしてゐる。シャトオブリアン、モオリス・ド・グラン以来、その労作が詩歌のそれと比べてかくも豊饒多様であつた歴史を通じて、一度も遮断や空隙を

知らなかつたわが仏蘭西の散文は此処に終りをつけた。あらゆる挿入文の源泉、人類の造り得る最も豊富にして精妙なる結句の一致は、遂に残らず活用された。パスカルによつて創られた「内なる韻律」、君臨する調音の理論は、転調、融解の比較を絶した豊饒さを以て発展させられた。一度ランボオの幻惑に身を任せたものには、ワグネルの一楽句と同じく、最早それを拭ひ除くことは不可能である。——論理的発展によつてには非ず、寧ろ音楽家に於けるが如く、旋律的な構想、並置された音符の相関によりて進行する思想は、緊切なる注意を招致するのでもあらうか。

×

×

私は筆を擱く。そしてもう一度、會つて彼のものであり、また私が巡つて来たこの地方を振返つて見る。黒く透明なムース河。メジエール山、険峻な丘陵の間に点在する昔の城塞。酷暑と雷動に充たされた谷の中なるシャルルヴィル。(彼が小娘の様な白い墓の下に眠るのは其処だ。)それからこのアルデンヌ地方。乏しい収穫。スレート屋根の小さな団り。そして地平線には常に昔嘶風の森の線。透き通つた水が奥の方から湧き出て緩やかに渦巻いてゐる泉の国。睡蓮と硬玉の中より延びた三本の長い黄ろい蘆に蔽はれた紺碧のエイヌ河。それからこのヴァンクの停車場。見渡す限り二列に並んだ白